

被爆80年企画展 ヒロシマ1945

HIROSHIMA 1945: Special Exhibition 80 Years after Atomic Bombing

2025 年 5 月 31 日（土）～8 月 17 日（日）

会場：東京都写真美術館 地下 1 階展示室
（東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内）



第 2 次世界大戦末期の 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、米軍が人類史上初めて、都市の上空に原子爆弾を投下しました。あの日広島が、3 日後に長崎がただ一発の爆弾によって焦土と化しました。その頃、自ら被爆しながら、あるいは壊滅した街と苦しむ市民の姿に衝撃を受けながら、カメラを手に原子野を歩いた者たちがいました。

広島では 45 年末までに推計で 14 万人が犠牲になったと言われています。あれから 80 年を数える現在、世界は 9 カ国が保有する約 1 万 2 千発もの核兵器に脅かされ続けています。そのことへの危機感は、2024 年に日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）へノーベル平和賞が授与されたことでも世界に示されました。

各地で戦争がやまない今こそ、克明な惨禍の記録を、被爆者の「決して繰り返させてはならない」という訴えとともに広く共有しなければなりません。このたび、被爆 80 年企画展として広島市民、報道機関のカメラマン、写真家たちが撮影した広島原爆記録写真と映像を公開します。それら資料の所蔵や保存・活用に深く携わってきた報道機関が連携しての展覧会は初めての試みです。



朝日新聞社

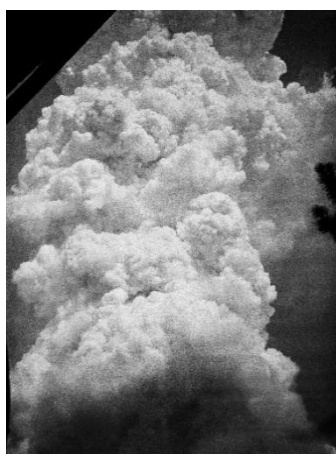
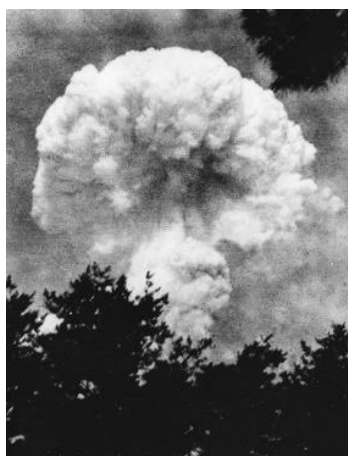


【本展の特徴】

- ・ 1945 年 8 月 6 日から年末までの約 5 カ月間を 3 つの時期に分け、推計で「約 14 万人」とされる広島の大規模被害の実態を時系列に近い構成で伝えます。
- ・ 被災した市民、報道機関のカメラマン、写真家それぞれの視点から撮影した写真です。
- ・ 8 月 6 日当日と、約 1 カ月後に連合国軍による占領統治が始まるまでに撮影されたものが多く含まれます。戦後間もなくの混乱と旧日本軍による文書焼却、占領期の報道統制と米軍による写真などの提出要求に撮影者があらい、自らネガの散逸を防いだことから現存する資料が多く含まれます。
- ・ 1945 年の広島を記録する動画として、現存が確認されている日本映画社撮影の 2 本を常時視聴できます。
- ・ 本展は、広島原爆記録写真と動画を国連教育科学文化機関（ユネスコ）「世界の記憶」に国際登録することを目指し、2023 年秋に「広島原爆の視覚的資料—1945 年の写真と映像」として申請した資料を基に構成しています。中国新聞社からの呼びかけが、申請並びに本展の開催につながりました。2025 年 4 月のユネスコ執行委員会において今回は国際登録の見送りが決まりましたが、日本ユネスコ国内委員会を所管する文部科学省と協議しながら引き続き登録実現を目指していきます。なお、写真 1532 点、映像 2 点を網羅したアーカイブサイトも昨年開設しています。是非ご覧ください。<https://visual-archives-hiroshima.jp/>
- ・ 原爆記録写真を各自で所蔵してきた報道機関が共同で展覧会を開くのは初めてのことです。広島平和記念資料館、並びに撮影者ご遺族が長年大切に保管し、このたびご厚意により提供して下さった写真と合わせ、所蔵元という意味でも非常に幅広い展示構成となっています。
- ・ 撮影者が書き残した撮影記録、広島平和記念資料館の学芸員や戦後史の研究者ら専門家による詳細な調査と鑑定に加え、報道機関が綿密な取材力でもって撮影状況や被写体となった人たちの足取りを解明した資料が多数含まれます。

【本展の構成】

第 1 章 きのご雲の下で ～8 月 6 日の記録～



左：★「きのご雲（さく裂 2～3 分後）」8 月 6 日、山田精三撮影 中国新聞社所蔵
右：★「広島陸軍兵器補給廠から撮影したきのご雲（1 枚目）」8 月 6 日、深田敏夫撮影 広島平和記念資料館所蔵

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分に米軍の B29 爆撃機エノラ・ゲイが T 字形の相生橋を目標に投下したウラン型爆弾は、広島市の市街地、島病院の上空 600 ㍎でさく裂しました。それからわずか約 2 分後、山田精三氏が巨大なきのご雲を撮りました。深田敏夫氏が撮影した 4 枚は、爆心地から最も近い地点で捉えたきのご

雲です。爆心地周辺の地表は 3000 度から 4000 度、爆風は秒速約 280 メートルに達し、爆心地から約 2 キロの範囲の建物はほとんどが全焼、全壊しました。中国新聞カメラマンだった松重美人氏は、きのこ雲の下で焼け出された市民を捉えました。市内にいた人間の惨状を伝える唯一の写真です。この日の撮影資料はいずれも、動員されていた市民や旧制中学の生徒が、爆弾が原爆とは知らないまま、立ち上る巨大な雲、猛烈な爆風と熱線にさらされて炎上する街や、傷ついた市民の姿を体験者の目線から記録しています。



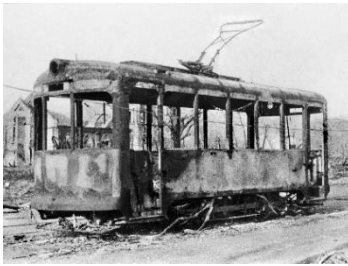
左：★「御幸橋西詰めの惨状（全景）」8月6日、松重美人撮影 中国新聞社所有 日本写真保存センター管理
中：★「罹災証明書を書く警察官」8月6日、松重美人撮影 中国新聞社所有 日本写真保存センター管理
右：★「炎上中の広島市街」8月6日、木村権一撮影 広島平和記念資料館所蔵

第2章 焦土の街 人間の悲慘 ～あの日からの1カ月間～

原爆が投下された翌日の8月7日以降、市民に加えて、日本軍の調査関係者や県外から入った朝日新聞、毎日新聞、同盟通信社の記者たちがカメラを手に焦土を歩きました。壊滅した街、大やけどを負い苦しむ市民、治療や救命が困難を極めた救護活動などを写しています。市内の至る所で遺体が火葬されていくさまや、原爆放射線が最初に引き起こした急性障害も記録されました。10日には大本営調査団が広島市内で「新型爆弾」は「原子爆弾ナリト認ム」との見解をまとめましたが、その事実が市民に向けて明かされたのは終戦後のことです。日本の敗戦と9月2日の降伏調印を経て、占領時代が始まる前後までの時期に当たります。米国の調査団などが広島入りして地上から写真に収める前の記録写真であり、希少性が極めて高いといえます。

2-1 壊滅した中心地区





前ページ 上段左：★「本通から西へ爆心地方面を望む」8月7日、岸田貢宜撮影 岸田哲平提供 広島平和記念資料館所蔵／同右：★「焼失した毎日新聞広島支局から北西に向かって」8月9日、国平幸男撮影 毎日新聞社所蔵／下：★「福屋新館から」8月7～8日、岸田貢宜撮影 岸田哲平提供 広島平和記念資料館所蔵
左：★「全焼した路面電車」8月10～11日、中田左都男撮影 共同通信社・広島大学原爆放射線医科学研究所所蔵

2-2 傷ついた市民



左：★「太田川の堤防に設けられた臨時救護所の負傷者」8月9日、川原四儀撮影 広島平和記念資料館所蔵
中：★「似島に収容された全身やけどの男性」8月7日、尾糠政美撮影 広島平和記念資料館所蔵
右：★「広島赤十字病院でやけどの手当てを受ける少年」8月10日、宮武甫撮影 朝日新聞社所蔵

2-3 街は火葬場に



左：★「西練兵場付近の被爆遺体」8月9～17日、佐伯敬撮影 共同通信社所蔵
右：★「焼け跡で火葬される兵士たち」8月10日、宮武甫撮影 朝日新聞社所蔵

2-4 救援に向かう



左：★「紙屋町交差点付近から南を望む」7月7～9日、岸田貢宜撮影 岸田哲平提供 広島平和記念資料館所蔵
右：★「広島東警察署前で食料を運び込む」8月9日、国平幸男撮影 毎日新聞社所蔵

2-5 終戦直後の広島 原爆放射線と急性障害



左：★『『原爆症』による死直前の兵士（9月3日死亡）』

右：★『『原爆症』の兵士（8月31日死亡）』

いずれも木村権一撮影 広島平和記念資料館所蔵

第3章 遠い再建 占領下の苦闘 ～1945年末まで～

原爆が投下されて1カ月以上がたってからも、根底から破壊された地域社会の再建は見通せず、おびただしい数の市民がやけどや原爆放射線による急性障害のため亡くなっていました。肉親を捜し、街を歩き続けている人が多くいました。親を失った「原爆孤児」は2千人とも言われています。そんな中で撮影者たちは、街で見つけた復興への萌芽や、懸命に生き抜こうとする市民の姿も記録しました。日本が連合国軍による占領統治へ移行し、米国の調査団が相次いで広島入りする時期に当たります。日本の学術調査団も活動し、同行した映像撮影班と東京の写真家が記録性の高い動画と写真を撮影しています。

3-1 破壊の爪痕



左：「焦土に咲いたカンナの花」9月18～25日、松本栄一撮影 朝日新聞社所蔵

中：「折れた煙突」9月11日ごろ、山上圓太郎撮影 毎日新聞社所蔵

右：★「壊滅した八丁堀電車通り付近」9月ごろ、川原四儀撮影 広島平和記念資料館所蔵



3-2 被爆調査とプレスコード

「マンハッタン管区調査団」をはじめとする米調査団が相次いで広島入りした時期に、撮影者たちが懸命に記録した写真が新聞報道でどう扱われたのかも概観します。戦時中、報道機関は厳しく統制され「大本営発表」に徹していました。「被害は閃光の一瞬」など、市民の動揺と戦意喪失を避ける意図が見て取れます。しかし終戦後は、「正視に耐えぬこの残虐さ」などの見出しで負傷者や焼け野原の写真も使われるようになりました。その頃広島で言われたのは「75年草木も生えない」。米軍は打ち消しにかかります。朝日新聞が9月15日付で原爆使用を「毒ガス使用以上の国際法違反、戦争犯罪」とする鳩山一郎氏の談話を掲載すると、米軍率いる連合国軍総司令部（GHQ）は東京本社版を48時間の発行停止処分にします。9月19日、プレスコ

ード（報道統制）が発令。占領政策への批判になりかねない原爆報道は、報道機関の自己規制も相まって事実上姿を消しました。米軍は被爆調査に関する研究の発表も制限する一方、原爆犠牲者の病理標本や多数の写真プリントの提出を日本の研究者や報道機関に求め、本国に持ち帰りました。原爆の「効果」を計る資料とされたのです。



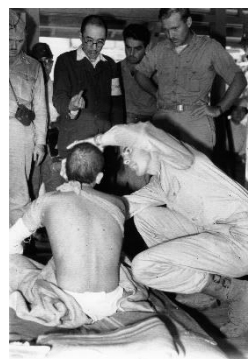
8月11日付毎日新聞大阪本社版「危険は閃光の一瞬」。写真説明には「新型爆弾刎(は)ね返した広島市」／「防空壕に開設された町会事務所」8月9日、国平幸男撮影 毎日新聞社所蔵



9月4日付朝日新聞大阪本社版「正視に耐へぬこの残虐さ」。写真は「広島赤十字病院でやけどの手当てを受ける少年」など使用



8月23日付中国新聞「残虐の極『原子爆弾』」／★「中国新聞社から東南方向を望む」8月9~17日、佐伯敬撮影 共同通信社・広島大学原爆放射線医科学研究所所蔵



9月12日付毎日新聞大阪本社版「七十五年説語る」／「大野陸軍病院にて患者を診察する米国・マンハッタン管区調査団」9月10日、新見達郎撮影 毎日新聞社所蔵

3-3 日本映画社の撮影映像

日本映画社は戦時中に数多くのニュース映画を制作した国策会社でした。ここでは、日映が原爆で壊滅後の広島で撮影、製作した映像記録2本を常時上映します。

・「日本ニュース第257号 原子爆弾 広島市の惨害」（約2分50秒）



1945 年 9 月 22 日に公開されたのが「日本ニュース第 257 号 原子爆弾 広島市の惨害」(約 2 分 50 秒)です。日本が降伏文書に調印した翌日の 9 月 3 日に昭和天皇の派遣で広島市内を視察した永積寅彦侍従の姿が写っています。日本で現存が確認されている、原爆投下から最も早い時期に撮られた広島原爆に関するニュース映像です。現在、日本放送協会(NHK)が所蔵しています。

・学術調査に伴う記録動画フィルム



日映は、被爆実態を正確かつ科学的に記録した映画の製作を 9 月上旬に決定。学術研究会議(現在の日本学術会議)が立ち上げた「原子爆弾災害調査研究特別委員会」の「補助機関」という位置付けで撮影班が同行し、9 月下旬から 10 月にかけて広島を撮りました。続く長崎で GHQ から撮影中止命令を受けながらも曲折を経て継続を取り付け、原爆被災記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」を翌年完成。しかしフィルムは米国へ送られ、1967 年の返還まで「幻の映画」とも言われました。本展では、製作スタッフが米側に渡さず極秘保存していた編集前フィルム(110 分)の抜粋を上映します。中国放送(RCC)と日映の流れをくむ日映映像が保存と活用に携わり、現在は国立映画アーカイブが所蔵しています。

3-4 林重男が記録した破壊

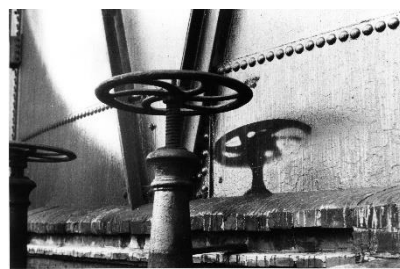
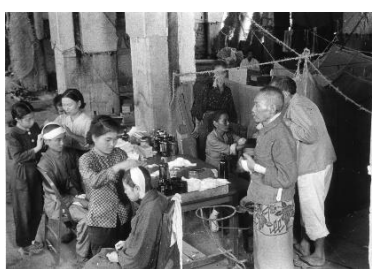
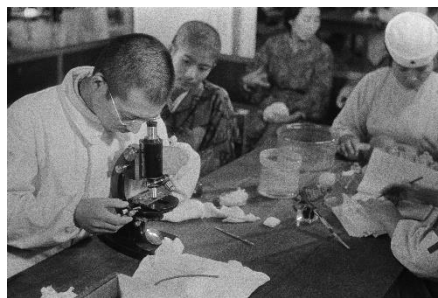
日本映画社の撮影班には、スチール担当として林重男氏と菊池俊吉氏が加わりました。林氏は「物理班」として 10 月 1 日から撮影。焦土と化した街に大きな衝撃を受けながら、市内の破壊実態を捉えました。広島県産業奨励館(原爆ドーム)を望む広島県商工経済会の展望楼から撮影したパノラマ写真は、広島の壊滅淵を伝える一級資料として知られます。



上段左から いずれも 10 月 1~10 日、★「下村時計店」★「爆心直下での残留放射線測定」★「島病院関係者への伝言板」★「黒い雨に汚染されたズボン」
下段 ★「広島県商工経済会望楼から」10 月 5 日、いずれも林重男撮影 広島平和記念資料館所蔵

3－5 菊池俊吉が記録した人間

菊池俊吉氏は学術調査団の「医学班」を担当。「聞いたこともない放射能とか原爆症という言葉が出たりで、とまどいの多い撮影」の中で、やけどなどの負傷者、脱毛した子どもを被写体とした医学撮影はもとより、生活の再建へ苦闘する市民や、復興へ踏み出そうとする街の様子もつぶさに記録しました。



上段 左から「広島赤十字病院の外来患者治療室」10月5～6日、「大芝国民学校の
外来患者」10月11～12日、「広島赤十字病院での血液検査」10月5～6日、
下段 左から ★「大芝国民学校に収容された被爆者の診察」10月11～12日、「袋
町国民学校に設置された救護所での診察」10月5～7日、 ★「広島瓦斯工場のタン
クに付いたハンドルの影」10月6～11日、いずれも菊池俊吉撮影 田子はるみ所蔵

3－6 焼け跡から復興の萌芽



左から 「己斐復興祭の行事案内を見る人々」10月19日、「紙屋町交差点付近の路面電車軌道復旧工事」
10月4～6日、「ビール立ち飲み所」10月11～20日、いずれも菊池俊吉撮影 田子はるみ所蔵

3-7 生きた証しを



左から ★「被災を知らせる伝言板」10月1~10日、林重男撮影 広島平和記念資料館所蔵／「埋葬者を示す立て札」9月18~25日、松本栄一撮影 朝日新聞社所蔵／★「比治山国民学校の『迷子収容所』」10月ごろ、川本俊雄撮影 川本祥雄提供 広島平和記念資料館所蔵

※1 ページ目の写真

①	②	③	④
⑤	⑥	⑦	
⑧			⑨

①★「頭髮の抜けた姉弟」10月5~6日、菊池俊吉撮影 田子はるみ所蔵 ②★「御幸橋西詰め惨状（アップ）」8月6日、松重美人撮影 中国新聞社所有 日本写真保存センター管理 ③★「陸軍船舶練習部から撮影したきのご雲（3枚目）」8月6日、木村権一撮影 広島平和記念資料館所蔵 ④「ひん死の兵士たち」8月10日、宮武甫撮影 朝日新聞社所蔵 ⑤★「本通から東を望む」8月7日、岸田貢宜撮影 岸田哲平提供 広島平和記念資料館所蔵 ⑥★「似島に収容されたやけどの女性」8月7日、尾糠政美撮影 広島平和記念資料館所蔵 ⑦「中国新聞社から北方を望む」8月9~17日、佐伯敬撮影 共同通信社／広島大学原爆放射線医科学研究所所蔵 ⑧★「広島県商工経済会望楼から」10月5日、林重男撮影 広島平和記念資料館所蔵 ⑨★「被爆後の市街地に立つ少女」8月9日、国平幸男撮影 毎日新聞社所蔵

【撮影者と資料の分類】

撮影者の所属や資料の所蔵者などで分類した8資料群から、写真約160点と映像2点で構成。

①広島原爆被災撮影者の会：

松重三男、木村権一、深田敏夫、尾木正己、鴉田藤太郎、尾糠政美、岸田貢宜、川本俊雄、川原四儀、北勲、岸本吉太、森本太一、林寿麿、陸軍船舶司令部写真班（13人1機関）

※1978年に広島県や隣県に住んでいた原爆記録写真の撮影者たちが結成。個人の元に残る市民撮影の原爆記録写真の散逸を防ごうと、撮影者や遺族から写真を集めました。資料の多くを広島平和記念資料館が所蔵

②中国新聞社：山田精三、松重美人、山本儀江、谷川長次

③朝日新聞社：宮武甫、松本栄一

④毎日新聞社：国平幸男、渡辺喜四郎、山上圓太郎、新見達郎

⑤同盟通信社：佐伯敬、中田左都男

※継承会社である共同通信社に加えて広島大学原爆放射線医科学研究所もプリントを一部所蔵

⑥林重男

⑦菊池俊吉

⑧日本映画社（中国放送関連、日本放送協会所蔵の映像）

【開催概要】

会期 | 2025 年 5 月 31 日（土）－ 8 月 17 日（日）

会場 | 東京都写真美術館 地下 1 階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

主催 | 中国新聞社 朝日新聞社 毎日新聞社 中国放送 共同通信社

共催 | 東京都写真美術館（公益財団法人東京都歴史文化財団）

後援 | 広島市 日本放送協会 日本写真家協会 日本ユネスコ国内委員会 広島県 （公財）広島平和文化センター

協力 | 株式会社フレームマン 株式会社写真弘社 広島国際文化財団

開館時間 | 10:00-18:00（木・金は 20:00 まで）※ただし 8 月 14 日・15 日は 21:00 まで開館

※入館は閉館の 30 分前まで

休館日 | 毎週月曜日（月曜日が祝休日の場合は開館し、翌平日休館）

料金 | 一般 800（640）円／大学生以下無料／65 歳以上 500（400）円

※（ ）は有料入場者 20 名以上の団体、当館映画鑑賞券提示者、各種カード会員割引料金

※障害者手帳をお持ちの方とその介護者（2 名）までは無料

【このリリースに関するお問い合わせ】

- ◇ このリリースに掲載されている図版のうち★が付いた写真は、本展に関する報道に限り、データと詳しいキャプションの無償提供が可能です。掲載をご希望の際は下記のお問い合わせ先までご連絡ください。その他の写真については、お問い合わせください。
- ◇ ご掲載の際は、必ず作品キャプションおよび和英いずれかクレジットの表記をお願いします。
- ◇ 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。
- ◇ なお動画は以下の URL で視聴できます。
 - [日本ニュース第 257 号 原子爆弾 広島市の惨害] NHK アーカイブス
https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009181274_00000
 - [学術調査に伴う記録動画フィルム] RCC 被爆 80 年フィルムプロジェクト
<https://rcc.jp/peace/filmpj/>
- ◇ 展覧会開幕前日の 5 月 30 日（金）午後 2～4 時、会場の地下 1 階展示室でプレス向け内覧会を行う予定です。事前申し込みが必要です。中国新聞社が対応します。
 - ・開幕日はご質問などに対応する時間を確保できません。内覧会での取材をお願いいたします。
 - ・27 日までの事前の申し込みが必要です。
- ◇ 開幕当日（31 日）の取材
 - ・開館後の地下 1 階展示室内のカメラ撮影については、午前 10 時～10 時半のみ東京都写真美術館から許可を得ています。東京都写真美術館の腕章を着用の上、撮影スポットを 2 カ所、指定させていただきます。その他、来場者が意図せず写真や映像に映り込まないよう展示室入口でお声かけする、コメント取材は地下 1 階展示室の受付前ロビーおよび 1 階の指定場所で行う、など制限事項があります。
 - ・午前 9 時から地下 1 階展示室で開幕式を行います。こちらでも取材可能です。
 - ・27 日までの事前申し込みが必要です。スペースが狭いため人数を制限させていただく場合があります。あらかじめご了承ください。

お問い合わせ先：中国新聞社編集局 （〒730-8677 広島市中区土橋町 7-1）

担当：金崎由美、小林正明 Mail: peacemedia@chugoku-np.co.jp

Tel: 080-2933-7268（ヒロシマ平和メディアセンター） 082-236-2455（読者広報部）

【撮影者プロフィール】

■広島原爆被災撮影者の会

松重三男（まつしげ・みつお 1911～89 年） 広島県職員でレントゲン技師。1945 年 8 月 6 日は広島県古市町（現広島市安佐南区）の自宅にいた。爆心地から北に約 7 キロの自宅近くの神田橋に避難し、きのこ雲を 2 枚撮影。被災者を乗せて可部町（現安佐北区）方面に向かうトラックも、自宅 2 階から撮った。戦後、広島県の保健関係の仕事が続けた。

木村権一（きむら・ごんいち 1905～73 年） 中国新聞写真部をへて、広島市宇品町（現南区）の陸軍船舶練習部写真班員。練習部構内で被爆後、きのこ雲や煙に包まれる市中心部の遠景を撮影した。45 年 8 月末から 9 月初め、東京帝国大の都築正男教授の医学調査で原爆放射線の急性障害に襲われた被爆者も写した。原爆で妻を亡くした。戦後は市内で土産物店を営みながら体験を語った。

深田敏夫（ふかだ・としお 1928～2009 年） 広島市内の 5 年制の旧制崇徳中を 4 年で繰り上げ卒業後、引き続き陸軍兵器補給廠（現南区）に動員されていた。爆心地から約 2.7 キロ南東の構内からさく裂後 20 分前後のきのこ雲を 4 枚続けて撮影。現存する広島原爆のきのこ雲の写真で最も至近距離。ネガも現存。戦後は市内でカメラ店を営んだ。

尾木正己（おき・まさみ 1914～2007 年） 広島県呉市の呉海軍工廠火工部に勤めていた。原爆のさく裂から約 40 分後、爆心地から約 20 キロ離れた同工廠からきのこ雲をライカで収めた。翌 8 月 7 日、救援隊に加わって広島市内に入り、市内各所で撮影した。戦後は安芸郡海田町の助役や収入役などを務めた。

鴉田藤太郎（からすだ・とうたろう 1917～78 年） 広島県西条町（現東広島市）の陸軍傷痍軍人広島療養所の事務官。爆心地から北東約 25 キロの療養所からきのこ雲を撮影。6 日午後、広島市内に救援に向かい、負傷者が逃げてきた広島東署で収容者の名前や負傷の程度をカルテ代わりに記録。戦後、旧厚生省中国地方医務局の経理課長などを務めた。

尾糠政美（おぬか・まさみ 1921～2011 年） 広島市宇品町（現南区）の陸軍船舶司令部写真班員。被爆翌日の 8 月 7 日、けが人が運ばれた沖合の似島で、軍医の指示を受けて負傷者を写した。以降も市内の臨時救護所などを撮影。母を失い、遺骨も見つからなかった。戦後は、郷里の島根県川本町で写真館を営んだ。

岸田貢宜（きしだ・みつぎ 1916～88 年） 広島市中心部の本通り商店街で写真館を創業。その後、旧広島城にあった中国軍管区司令部の報道班員。出張中に広島県北できのこ雲を見た後、広島市内に入った。翌日、爆心地から約 450 メートルで焼け落ちた写真館跡の辺りから廃虚を撮影。広島市の市街地の壊滅直後の状況を知る上で最も貴重な資料の一つとなっている。戦後は再び本通り商店街で写真館を営んだ。

川本俊雄（かわもと・としお 1901～68 年） 広島市内で写真館を経営する傍ら、広島県警察部の写真班員の委嘱を受けていた。45 年 8 月 6 日午後、出張先から車を乗り継いで広島市内に戻った。翌 7 日以降、警察の要請で市内一円を回り、建造物の破壊状況や交通機関の被害を撮影。戦後は写真館を経営。

川原四儀（かわはら・よつぎ 1922～72 年） 現在の広島県呉市出身。陸軍船舶司令部の写真班員を務め、爆心地から南東約 4.6 キロの同司令部で被爆。大本営調査団に同行し、市中心部の惨状や臨時救護所を撮影。ネガは終戦時に軍の命令で処分されたが、一部のプリントを自らの手元に守り、手製の写真集にして保存した。戦後は広島市内で写真館を営んだ。

北勲（きた・いさお 1911～2001 年） 広島管区气象台（現広島地方气象台）の技術主任だった。爆心地から約 3.7 キロの江波山山頂の气象台で被爆。45 年 8 月末から 9 月下旬に被害実態を撮影。原子爆弾災害調査研究特別委員会の気象部門の調査で「黒い雨」の降雨状況も記録。戦後、広島气象台などに勤めた。

岸本吉太（きしもと・よした 1901～89 年） 広島市内で写真館を経営。牛田町（現東区）の自宅で被爆し、8 歳の長女を原爆で失った。45 年秋から中国配電（現中国電力）の依頼を受け、市内一円で発電所や電柱など配電設備の被害状況をつぶさに記録した。戦後も写真館を営み、復興期の街の変遷を撮り続けた。

森本太一（もりもと・たいち 1916～78 年） 東京のオリエンタル写真学校を卒業後、広島市内に写真店を開いた。戦時中は召集を受けて山口県内の部隊に配属。終戦 2 日後から愛用のライカを携えて広島市内に入ったという。自宅は焼け落ち、宇品町（現南区）の倉庫に寝泊まりして知人の消息を求め歩きながら市内を撮影した。

林寿磨（はやし・かずま ～1979 年） 広島市内の百貨店の福屋に勤務。福屋から出向した南観音町（現西区）の配給会社の寮で被爆した。1945 年秋、家族が疎開していた志和堀村（現東広島市）から広島市内に通い、鉄筋ビルの福屋や中国新聞社が焼け残った八丁堀地区を写真に収めた。

陸軍船舶司令部写真班 司令部は爆心地から南東に約 4.6 キロの広島市宇品町（現南区）にあった。司令部の写真班には、本資料の写真の撮影者に含まれている尾糠政美氏や川原四儀氏が所属。班員による撮影と分かっているものの、撮影者までは特定されていない写真を陸軍船舶司令部写真班撮影と位置づけている。

■中国新聞社

山田精三（やまだ・せいそう 1928 年～） 夜間中学に通いながら中国新聞社で働いていた当時、爆心地から約 6.5 キロの広島県府中町の水分峡（みくまりきょう）で原爆さく裂の約 2 分後を撮影。最も早く撮影された広島原爆のきのこ雲とされる。戦後はプロ野球広島東洋カープ担当記者、運動部長などを歴任。府中町在住。

松重美人（まつしげ・よしと 1913 年～2005 年） 広島県呉市出身。中国新聞社写真部員で、中国軍管区司令部報道班員でもあった。爆心地から約 2.8 キロの自宅で被爆。その日のうちに爆心地から南東約 2.2 キロの御幸橋西詰めに逃げてきた被爆者の姿をはじめ広島市内の惨状を 5 枚撮影した。戦後も同社に勤めた後、「広島原爆被災撮影者の会」代表に就いて原爆記録写真の保存に尽力。病身をおして晩年まで被爆体験証言を続けた。

山本儀江（やまもと・よしえ 1911～98 年） 現在の原爆慰霊碑近くの材木町 33 番地で理髪店の傍ら写真現像・焼き付けを営んだ後、1943 年中国新聞社入社。召集され西観音町（西区）で被爆。復員後、旧本社屋上から南方向の廃虚を谷川長次氏と共同で写真に収めた。戦後は編集局調査部長などを歴任。

谷川長次（たにがわ・ながじ 1924～2002 年） 1938 年中国新聞社入社。戦後は写真部長、編集委員などを歴任。

■朝日新聞社

宮武甫（みやたけ・はじめ 1914～85 年） 撮影当時、朝日新聞大阪本社写真部員。原爆投下後、中部軍管区司令部（大阪市）の宣伝工作隊カメラマンとして 1945 年 8 月 9 日から 12 日まで広島に入り、原爆投下直後の惨状を撮影した。終戦後、撮影したネガフィルムを GHQ に提出するよう求められるなどしたが、自宅の縁の下に隠して守り続けた。

松本栄一（まつもと・えいいち 1915～2004 年） 撮影当時、朝日新聞東京本社出版局カメラマン。長崎で 22 日間撮影し、1945 年 9 月 18 日から 8 日間広島に入った。被爆まもない広島と長崎の両市を撮影した数少ない報道カメラマン。終戦後、撮影したネガフィルムは会社のロッカーに隠して守り続けた。林重男氏らとともに「反核・写真運動」でも活動した。

■毎日新聞社

国平幸男（くにひら・ゆきお 1916～2009 年） 撮影当時は毎日新聞大阪本社写真部員。原爆投下から 3 日後の 1945 年 8 月 9 日午前、大阪から派遣された取材班の一員として広島市に入り、市街地の惨状を撮影。広島平和記念資料館の本館入り口に展示されている「顔一面に負傷した少女」などをカメラに収めた。戦後は大阪本社写真部長などを歴任。

渡辺喜四郎（わたなべ・きしろう 1902～52 年） 撮影当時は毎日新聞山口支局長。原爆投下直後、山口支局から広島市に入った記者の一人で、爆心地に近い水主町（現中区）の広島県庁付近など壊滅した市街地を撮影した。

山上圓太郎（やまがみ・えんたろう） 1907 年生まれ。撮影当時は毎日新聞大阪本社写真部員。原爆投下から 1 カ月後の 1945 年 9 月上旬、市街地の惨状や米調査団の活動などを撮影した。日中戦争下の中国・北京、日本統治下の台湾などでも撮影し、戦後は大阪や神戸の空襲跡を航空撮影した。

新見達郎（にいみ・たつろう 1914～48 年） 撮影当時は毎日新聞大阪本社写真部員。原爆投下から 1 カ月後の 1945 年 9 月上旬に広島市に入り、市街地の惨状や大野陸軍病院（現廿日市市）を訪れたマンハッタン管区調査団の活動などを撮影した。

■同盟通信社

佐伯敬（さえき・たかし 1915～97 年） 1945 年 3 月から同盟通信社大阪支社の写真部員となり、8 月 9 日から 17 日ごろまで広島市内を撮影。煙突 1 本を残し焦土と化した市街の写真は 19 日付の朝日新聞、毎日新聞などに掲載され、被爆の惨状を初めて全国に伝えた 1 枚とされる。戦後は 48 年に読売新聞社へ移り、大阪本社写真部などで勤務。

中田左都男（なかた・さつお 1920～94 年） 1943 年に同盟通信社に入社し、大阪支社編集部に配属。45 年 8 月 10 日、大阪帝大（現大阪大）の浅田常三郎教授が率いる調査団に同行して広島市に入り、11 日まで爆風で脱線した山陽本線の貨車や西練兵場の被爆遺体などを撮影。戦後は後身の共同通信社に一時在籍。

■写真家

林重男（はやし・しげお 1918～2002 年） 東京生まれ。東京写真専門学校を卒業後、対外宣伝グラフ誌を発行する東方社（東京）に 1943 年入社。文部省が学術研究会議（現在の日本学術会議）に編成した原子爆弾災害調査研究特別委員会に同行した日本映画社の記録映画撮影に参加。物理班のスチール担当として 10 月 1 日から広島を、13 日から長崎を撮影。戦後も東京で写真家として活躍した。写真家グループ「反核・写真運動」の運営委員長を務め、核兵器廃絶を訴えた。貴重なオリジナルプリントやネガの収集と保存に尽力し、自身の撮影ネガは生前の 2000 年に広島平和記念資料館へ託した。

菊池俊吉（きくち・しゅんきち 1916～90 年） 岩手県花巻市生まれ。東京のオリエンタル写真学校などを経て東方社に入った。林氏とともに原子爆弾災害調査研究特別委員会に同行した日映の撮影班に参加。医学班のスチール担当として、原爆投下から約 2 カ月後の広島で被爆者の傷や放射線による急性障害を数多く写した。1947 年、広島県観光協会が企画した海外向け写真集「LIVING HIROSHIMA」（生きているヒロシマ）の撮影に当たり、木村伊兵衛氏らと占領下で復興に取り組む広島を撮影。科学分野の撮影などで活躍し、「反核・写真運動」にも参加した。

■日本映画社

1940 年に日本ニュース映画社として設立。翌年、日本映画社に改組。第二次世界大戦中、ニュース映画と多数の国策宣伝映画などを製作した。戦後占領期の 51 年に東宝の全額出資によりニュース映画部門を中心に日本映画新社に改組。教育映画部は分社化された。2009 年、日本映画新社解散。1945 年撮影の「日本ニュース第 257 号 原子爆弾 広島市の惨害」「学術調査に伴う記録動画フィルム」の権利は日本映画新社に継承され、現在、前者は日本放送協会（NHK）が所有。後者は日本映画社の流れをくむ日映映像に継承され、フィルムは中国放送（RCC）を経て国立映画アーカイブに寄贈された。

なお、広島平和記念資料館（広島市中区）でもユネスコ「世界の記憶」申請資料を紹介する令和 6 年度第 2 回企画展「広島原爆の視覚的資料—1945 年の写真と映像」展を東館 1 階で開催しています。合わせてご覧ください。